

特 28

169

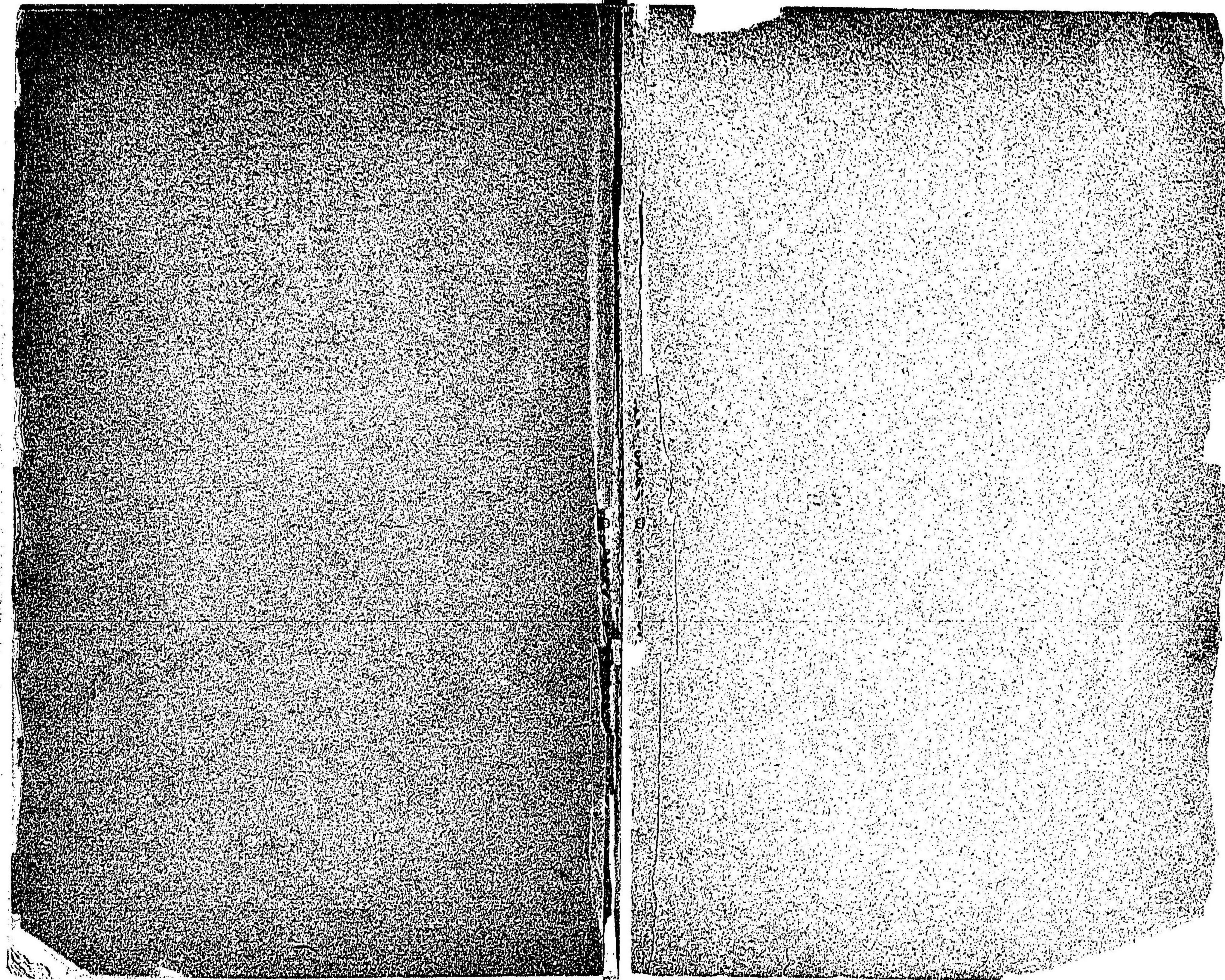
依田孝著

日本名櫻

東京の花

櫻

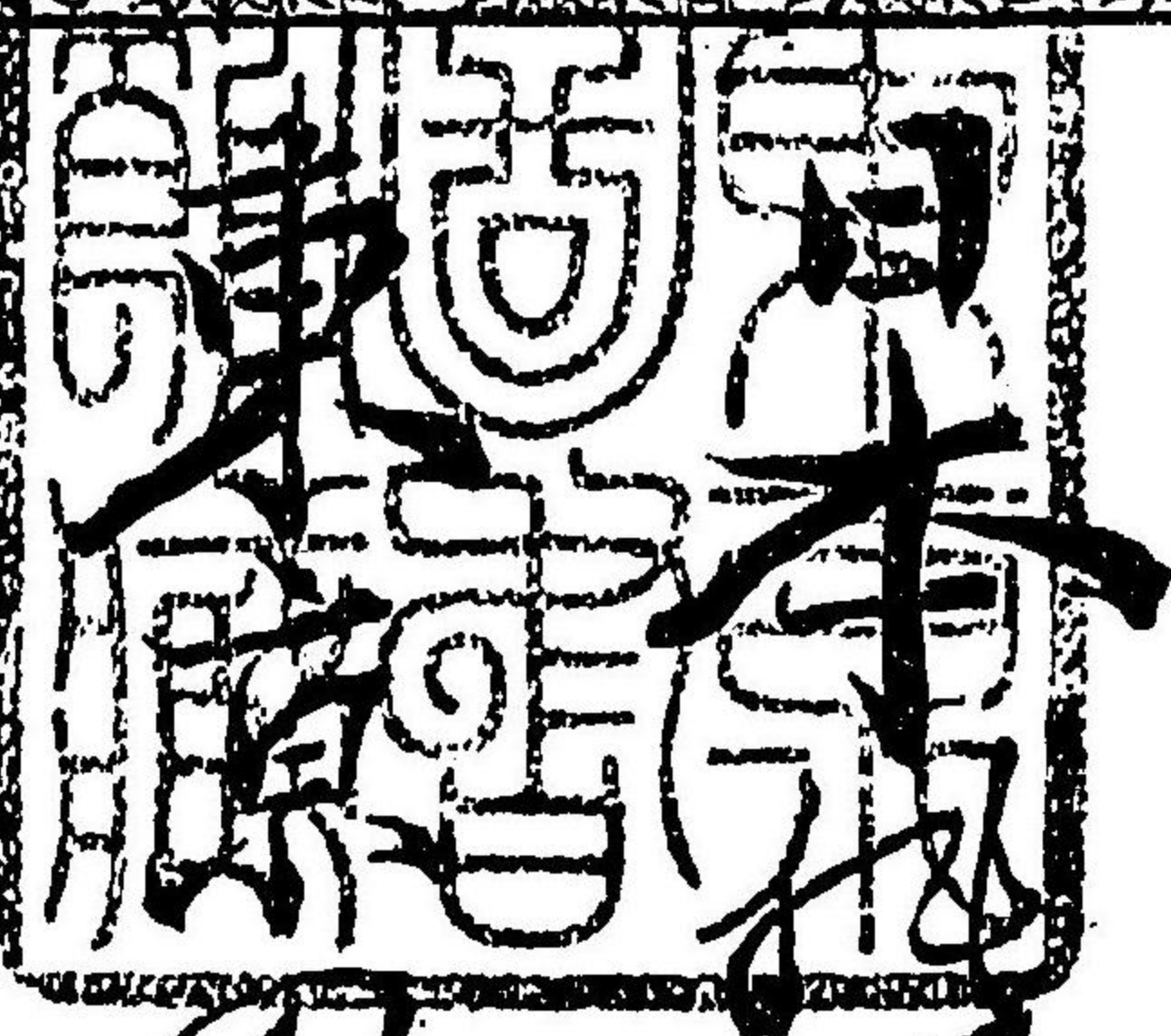
東京天竺書舗



特28
169

№16949/22

東京
天竺書舖



櫻
の
花

櫻

依田孝著



日本にっぽんの櫻さくらのはるかき
 東京とうきょうにて花はなを賞あやむするものは、櫻さくらを第一だいいちとあし、泰西たいせいの密薇みぎわいを
 我國わがくににて花はなを賞あやむするものは、櫻さくらを第一だいいちとあし、泰西たいせいの密薇みぎわいを
 賞あやむするに勝まさり中華ちゅうかと自稱じしやうする支那しなにさへ櫻さくらあく櫻さくらに似
 たる花はなあれども、其色そのいろ紅べにに過ぎたり、岸花がんか紅べににして水を照あす
 といひ、花はな燃もんと欲ほといひ、山櫻さんさくら落岬らくさきを扶たすくあさいへるを以もつ
 ても知しるべし、若しも我國わがくにの櫻さくらをして、泰西たいせい及支那しな等にありた
 らんには、彼の蜀山しよくさん兀ぶつの筆ふでも鋒ほこを尖とらし、蒲ほマル、美みルトン、三
 千丈さんぢやうの涎よだれを流ながし、詩しにも文ぶんにも記しすべし、夫また我國わがくにの櫻さくらに種しゆ類るい
 多く、大おほき輪りんあり小こき輪りんあり、一重いちじゆう櫻さくらのうち、白しろ色いろと薄うす
 紅べに色いろとあり、其名そのなは處ところにより異ことにすれども、八重やちじゆうにて紅べに色いろを
 含ふみたるを緋櫻ひさくらといひ、青あお色いろを帯もたるを淺黃せんわう櫻さくらといふ、總すべて
 櫻さくらは香かほあきにも抱かからず、此この淺黃せんわう櫻さくらの一種いっしゆに限り、香かほあり、吉野よしの

櫻は一重にても美しく、柳を兼たる糸櫻、霞にまかう榊櫻、雲珠櫻、宇紺櫻、墨染櫻、其名擧て數へがたく、且又名には餘り必要もあし、八重も一重も先づ櫻よて然るべく、唯咲も残らず散も初めずといふ眞盛を見るこそ、實に櫻の花を見る人といふべし、我國千早振昔は、花といへば梅のことをいひしが中昔より花といへば櫻のこと、極め雲の上人より、薪を負へる人まで、いかに待せて又待せ、待達にまでこえこがれ櫻町中納言の祭は、此花の盛り短きを歎きけふ見ずは悔しからまし、花ざかり、咲はどもあく散んとすらんあど讀ける我國の人、心君父を尊み、長上を重じ、人を慈み、國を愛し、耻を嫌ひ、其心の凝ては、死すとも惜まざる、恰も櫻の一夜に散失せるが如くあるに、因縁し、大いに又此花を賞するに至れり、東

京は我國の花ともいふへき所にして、殊に今は九重の雲深くもある都の錦とあり、今年は又我國にて前にあき國の掟を立られ、柳櫻をこきませて、愛で、悦び賑ひ、百千鳥囀る春あれば、物ごと新まる年の明治二十二年名にしおはいざこと問む都鳥、比待得たる櫻がりど人々いひはやすものから、吾輩も心ばかりの田舎土産にと、此冊子を綴り、其名を櫻と題す、支那にては、曠昔梓を以て文字を刻み、我國にては櫻木を用ゆれども、今は一寸早廻しの活字ありて、速に書籍もあることを得れば、吾輩足曳の山路ある、つゝからの如き文もこゝにしろしぬ、

明治二十二年四月のあかば 蘆の舎主人

日本の花櫻

目次

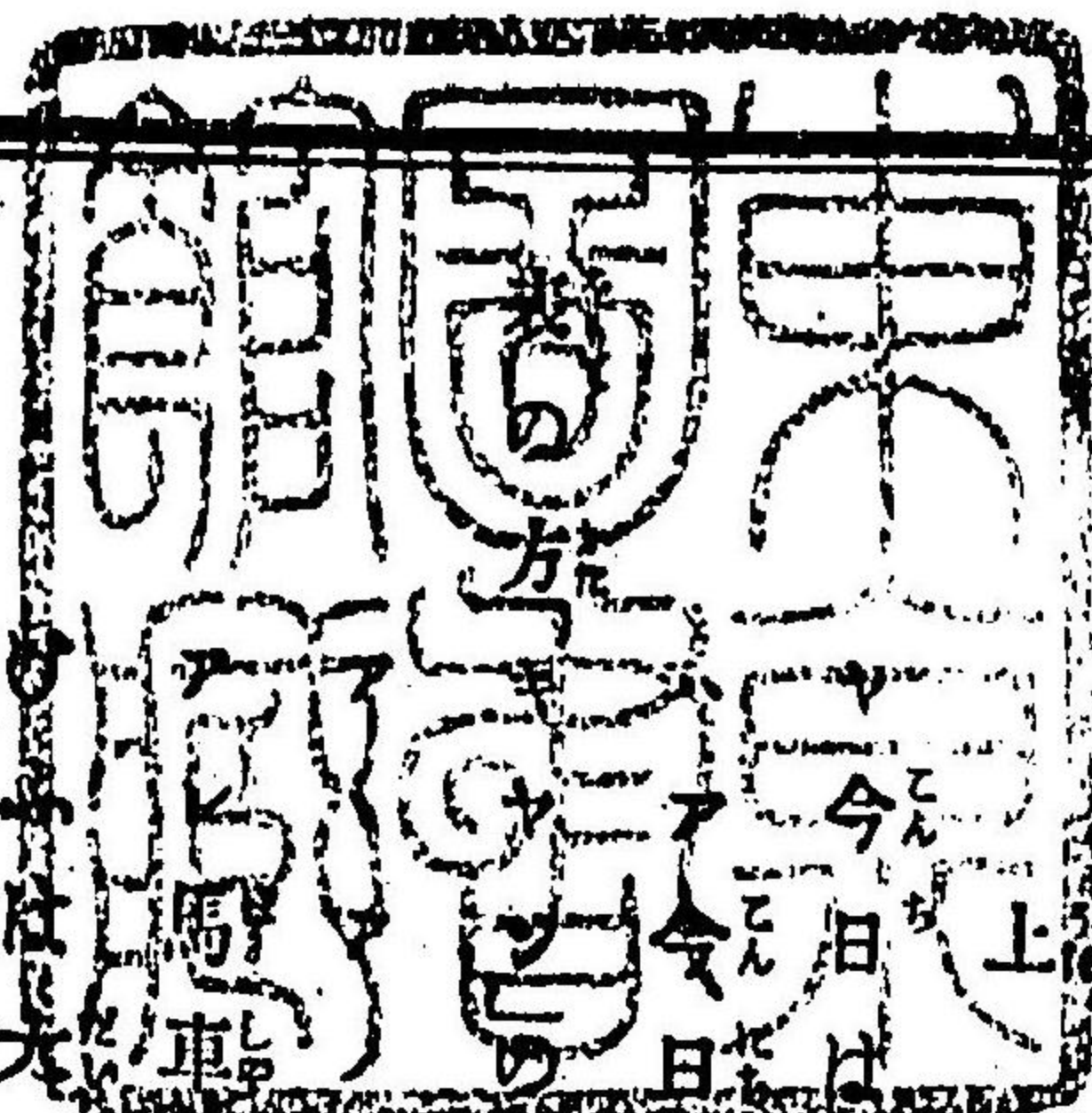
- 第一 上野
- 第二 花の宿
- 第三 櫻の皮
- 第四 浅草の観音
- 第五 増上寺
- 第六 飛鳥山
- 第七 向島
- 第八 櫻に梅の香を加ふ

目次畢

目次

東京の花櫻

蘆の舎主人 著



野の天気だ。今日は天気でございます。一匹尾を踏れた犬。老婆さんは危ない。馬車に避けた荷車が。ひまは大部人足が早い。

今日は日曜ゆへ。日曜で思ひ出した先日約束したことで、十時頃まではさうさう、帳場で何か調ると思へば、はや一服の煙草の煙

に捲揚んとして、通町邊の太物店の主人が、番頭に對して居、其主人が花主先の旦那と、今日上野へ行く心組である。

ア、寝むたい、モ起たのか。

ハかきあさいよ。

何をゴテくするのだ、ム、支度をするのか。

知れたことだよ、モ疾に出来てぬますよ。

ナニ朝飯、早いあ、今日行のか連中は。

岸勝アンの連。

此岸勝といふは、多く常磐津の師匠が、豊太閤の瓢たんではあ、樽でもあ、才配執て裏店住居職師の細君たちがお花見だらう。

ハ、ア、曇たのか、花曇鐘は上野か浅草か、ゴーンの音で目が

覺た、春の夜のまんたる長きに眠ることに苦み、左あきだに山鳥のいきどきに體屈ある一ツ枕の老人。ナニ雨がシブくいまくしい靴も磨いて置くし、今日の休暇をはびんで居たのに、嗚呼花時風雨多しと沈着しても居られん、アレ、雨アレ雨、しかたがねへ、レヨか大天幕を發明して僕の遊に行くと處だけ、レヨしたら其天幕を、ム、困ったものと涕がホロホロリは、番生の夢休日の朝寝で、むっくり起る下宿屋の二階。御案内頼みやす、朝飯も済みました、きのふは獸類の種々あるのを見ました、今日は其種々ある品物の所から案内を下され。
ハ、博物館でございませうか、今日は生憎休日得上野は人が大層に……

人どみかあ、それあら高輪の仙岳寺へ。
 ソレハ、この宿から大層離れてゐます、今日は吾妻橋
 邊から御見物あされて、銀座通まで御覽あされ、と諫
 むるは日本橋區邊の旅店に、田舎の爺さん婆さんが、
 宿の出入の案内の者と、一小隊繰出し前の問答。



高帽眉深黒塗の腕車を手早に下り、タノモリ、ドールで、ズツ
 と通るは、南部縮緬の長着に、七子の黒の紋附の客。

ヤ、秋津君コレへ。

其後御無音、今日はお閑かす。

ナソノ相變らず、ケレド上野の花は七分通り。

ドヲシテ、八九分見頃だ、今から行ふと思ふて誘ひに

来たのだ。

宜からう、先づ一服。

床にある時計は、ガチ／＼響いてゐるうち、ジーンと凝壁にあ
 り、チンチン……、十時主人は、それあら支度と起つ、客は
 今日の新開日曜にも休刊で、お新聞紙の傍にあるを見て、
 雑報、ナンダ昨日三橋の交番の前で職師体の男へ、外国人の
 ステッキがあたつたとか、さはつたとかソコア其男が外国
 人の眼の玉をひしぎ出した、成程コレハ剛勢ステッキにやり
 こめたの、ハ、ア定めし花見の歸りで双方酔てゐたと思は
 る、胸中主人の身支度は濟みかまたせ申た、君滅法立派の
 服を駢たさ、ナ、コサ家婢がお車が参りました、ソレナラと兩
 人突立つ、疊附の下駄はお揃に爪先きを揃へてゐる、車も梶

支度が自然後る、と思ふから、客が通らんのだからかぞうだか
こゝは、松源の二階で、女中は、あんず。「ア、君何にしやう櫻鯛
を一ツ加へて外はあんずかいしいものを見つころつて、ピ
ールを、ハイ只今君向に辨天、ナニサ辨天は洲崎へ越た、シヤ、
あゝ、無ければ知れたことだ、それも去年の秋に知れた事だ
「君此床の繪は何であらう馬が居て、ムーこれは老人が自慢
の馬を、競馬にださうと見てぬる所だあ、塲所に取ての面白
い考、コレハ人間万事塞翁の馬で、是眞が餘程思ひ切て書た
ハ………僕等今日一日の樂も、矢張塞翁の馬。」ム………ソナ
ものさといふ中に、御茶が出て着が整ひ、ビールも出た誠に
今日は取返まして、「ヤナニ。」か酌にて飲はじめし兩人は、先刻
二輪の腕車秋津と、一人は日出といふものだろう。座敷の半

席を占めて、先きに居た婦人二人あり、一人は五八に近から
んで見える凛とした婦人。一人は二八を越つらん、ともいふ
べき女子束髪の結方、恰好、顔かたち秀て、作り花の替の相当
あるに、總体の衣裳もかあひ。女中が一人始終附添居て、鄭重
にする体、これは相當の親子と見えると見たは、秋津日出の
兩人の考、秋津日出の兩人を、何人あるや、これは文學士あた
りを見たが、二人の婦人であるか、女中が車夫にも皆畫食を
濟したと告げる、同時又勘定を濟して、二人の婦女起ち、皆様
の一言は、年まの婦人が、極めて小聲、梯子階をトック、黒の
羽織と、花やかなの衣裳は、雲と霞で、天降りかすかどころか、ハ
ツキリと失にけり。日出は、秋津に問ふていふのに、斯いふ所
から、小説の發端にあるのだらう、秋津否々、何も關係のあい

花見のことだから、僕等は、續きもの、引合にはあらぬ……

花の宿

白月毛の馬に打乗り、赤地の錦の直垂、黒糸威の鎧に立鳥帽子を着、色白く、髭濃に實にも一方の大將と見へ給ふ。一騎漸に添ふて行き給ふ。此方の磯より十騎餘りアラでござんされ大將といふ間もあらず。大將は引返して、二刀三刀打合ひしに。三人馬よりドツカと落つ。後ある數騎進み兼ね。部將進で馳かへり、引組揃合ふ其勢ひ、廻る花輪車砂烟双方馬よりぞうと落つ。大將部將を組伏せて、鎧どうしを手早に抜き、挑みあがらに突立てしが、胸板を突走らせ咽の片頬を貫けは。折しも兵士集り、大將の右手の腕を打落せり。大將叶はじと思ひしが、片手に力を極めけん。部將を取て、二弓あまりも投げ

捨鎧の上帯引切り、物具脱捨、西に向ひ、今に自盡と見えければ、部將漸く起上り、太刀引抜き大將に向ひ、

御身は誰人にて渡らせ玉ふか。

己は不覺もの、名乗れと言れて名乗るべきか、我を討て勤賞に預るべし、

と自若として、口に唱名せらるゝ。と見えければ、部將進み寄て、大將の頸を討ち、傍に脱ぎ捨玉ひし、物具を見るに一巻あり、取具して、首と共に本陣へ持歸り、一卷を抜き見るに、多くの歌をしるしあり、その中に旅宿花と題して、

行くれて木の下かげを宿とせば花やこよひのある
じまらまし、
忠度

とありけるに、薩摩守と知られたり、此薩摩守は、太政入道

清盛の弟にて、心も剛に、身も健に、おはしけれども、盛んあるもの衰へ、驕るもの久しからず、平家の運の盡きけるが、墓もくも此所にて、命を部將に與へたり、此部將は、源氏の士、岡部の六彌太忠澄にて、藤摩守を討たる面目を得たりける、此戦は、源平の戦、元暦元年二月七日のことにて、九郎判官義経、越を攻め、平家の一門を須磨の浦に追ひたてたる、昔の夢の跡あるとき、明かしにて、盛衰記の焼直し

因にいふ、寄席は東京の花の一ツで、東京に一宿でも、住居でも、煉化から、荒屋、一夜の淋しきを明かすは、寄でも聞かうといふもの多し、故に、義太夫、浄瑠璃、講釋、落語、琴で、長唄細で端物、ギヤアといふ時分から、其道に修行を凝して、一名を搦せんものと、腕こき、懨こき、咽を辛し、お客様か慰み

ヤンヤと御前頂戴有難う、毎夜お馴染のお客様は、三錢でも五錢でも、生涯は一枚のお金、又紙幣を花と稱け、花をじらと張る、人氣大うけあり。今は又世の進むに、随ひ、演藝、矯風會なども組立て、お客様の區域を上等に擴めんとするが、併し區域を擴めんとして、却て上中下三等の區域を狭むる、狂風怪良は感服しねへ、芋の煮えたも、御存じか御用心く、是は照しの説明し。

櫻の皮

姉さん、けふは叔母さんの所へよるのは止て、小花さんの所へか寄あさいよ。
 花の頃だから、定めし世話しあからう。

アせうが先日小花さんが是非といひましたから、お訪(たづね)きさい。

二人の娘は、姉妹と見えるが、察(さつ)する所(ところ)待合(まちあ)當(あた)りの女子(こ)子(こ)風(ふう)に、て、藝妓(げいぎ)でもする、小花(こはな)といふものを知る、姉(あね)さんたちと見(み)え



格子(かぢ)子(こ)携(た)入口(いりぐち)の提灯(ていとう)は大陽(たいやう)と反(はん)對(たい)で、晝(ひる)の間(ま)は隱(いん)然(ぜん)としてゐる、

ハア毎日(まいにち)苦勞(くろう)がへがあら、昨日(きのう)も骨折損(こせつそん)かまけに昨夜(けさ)やけ飲(よ)ときて心持(こころもち)が悪(わる)ぬ、

とぶらり柱(はしら)にもたれ、箱屋(はこや)でも相(あ)手(て)に客(きやく)の辻占(つじうら)話(わ)でも、しやうか、といへさうも所(ところ)へ。格子(かぢ)子(こ)戸(と)ガヲリ。

誰(たれ)だへ。

今日(こんにち)は。

オヤ廣(ひろ)さんかへ、此方(こつち)へお上(あ)りあ。有(あ)り難(がた)うで座(ざ)います、お客(きやく)様(さま)です。

今日(こんにち)は心持(こころもち)が悪(わる)いので誠(まこと)に濟(きま)しませんが宜(よろ)しく。困(こま)りました子(こ)、鳥渡(とりわた)でも願(ねが)います。

お客(きやく)様(さま)はどなた。

ヤ誰(たれ)様(さま)か知(し)らんが、官(くわん)員(いん)らしい方(かた)が御(ご)兩(りやう)人(にん)。

面(めん)白(しろ)くもあいら。

イヤ商(しょう)法(ほう)でもあさる方(かた)。

ひつツこいねへ。マが新(しん)聞(ぶん)の先(せん)生(せい)か演(えん)説(せつ)でもする。

いやだよ。

御病氣は昨夜あまり遅かったの。

それもありませう。

今日は人足が早く附ましても、大ぶ雑沓します、大て

い賈切の札を懸けませう。

昨日のれ客の亂暴には、實に………

お話は後にして正真にいけませんか。

どうぞ、宜う。

「ハ鳥渡御免。」

さうぞ、

と断はったと思ふ中に、又格子戸ガラ〜〜

うるさい子！。

こんちは、こんちは。

どあた。

わたい。

「ヤ、お松さん竹ちゃんも宜いこと、サおあがんあさ

い。

か松お竹はハタ〜〜上る、ラ、さよが大きくあつたの。猫は

ニヤ〜〜と小聲。

此兩人、花盛りだか、蕾だか、名は花見に出掛たともいひさう

の体だが、其口はか鼻、否か花の櫻の顔を見せに歩くのたろ

う

女がよると、丸で雀や燕が集まつたやうだ、けれども當世は

雑誌、新聞、著述まで女の身爲めにある、假名書まで藝妓、茶

屋女風情たりとも(聞さへあれば、讀ますから、ニヤンともい
はず沈黙の女中もあるが、讀むといふは飾ばかりで、小説本
を、玻璃戸の小棚へかざり立て見たり、新聞紙を、格子の外か
ら幾ッも投込まして置いて見たり、漢語を(鹿爪)遣ッて、見たり
洋語を(聞かぢり)遣ッて見たりをせするが、自分の腹の中か
讀まぬいと、から丸で雀や燕のやうに舌り立るものだ……
廣又来て

小花さんどうぞ願います、

と急ぎ御出馬の請願をする。

ム！今は餘程気分がよるしい、ソレナラ。

と支度をし、皆さん遊んでお出ささい、今にも金太が歸りま
す、トランプでもゆるりと。

お松 私共も淺草まで、後程から
小花 ヲヤサウ、用事が有たあら龜滑まで、どうぞお留
守を。

お松 承知いたしました。

お竹 姐さん私にが。

と後がらカナンく



商人 先生のお煙草入は凝ていますと古うござい
ます。

先生 イヤナニ是は安もの、併し持こんただけが直打
のある日本の櫻で(惜めは物も貴とく遣ふ、惜め
は物は貴とくある、ムく胸中)

先生 得たり顔で、籠筒を撫で拵くる。

商人 小花とかいふ藝者は何邊へ行た、今日はの顔見せと御祝儀の一聲のみで酌はせぬの、か畑が冷てぬる先生サか酌をしませう。

先生 これは君に失敬、ヲト……、ヤこの櫻の皮で思ひ出しました、女子に兒島高德は取らせました

商人 小島高德とは。
先生 紙幣にある、ソレと矢張小聲商人も小聲に化せられ)

商人 成る程、學者先生の符帳は商人とは違ひます
あ、ナール程。

先生 兒島高德の履歴をああなたは御承知か子。

商人 櫻の木へ樂書をする書は、色々のもので見ます
が、いはれ因念は能く存じません。

先生 一寸因念を聞でもらいませう、樂書あぞと申されては困る、兒島高德は楠や新田と同じ時分の人でありませう、高德が義兵を擧げし時に、主上即ち御醍醐天皇が、隱岐の國へ遷されんとする時、で高德は備前と播磨の境ある舟坂山に隠れぬて、主上の御出を待ち途中にて敵を討ち退け、主上を森ひ返さんとせしが、途を違へられたので志を得なかつたから、それより獨り主上の御後を慕ひ行き、主上の御坐あるお庭に忍び入り、櫻

の木を拈くりてはあゝ削ッで、

天莫空勾踐てんむくうこうせん時非無范蠡ときひなふはんらい

と一聯の詩を書記せしに、翌朝發固の武士これを見付たれども、さッばり分らなかつた、するを此ことが上聞に達し御覧あり殊の外お悦び遊ばされたといふことで御坐るが、其詩の意は今支那の古き時代の呉といふ國と、越といふ國で戦ひし時に越が呉に負けて詮方盡きたる時越王勾踐の臣に范蠡といふ者ありて、能く策を立て終に呉を亡したといふことあり、講釋あで、會稽の耻辱を雪ぐるといふ、此所のこと、これを引て、畏こくも、主上を越王勾踐に比へ、足

商人

利を呉に比へ、高德は自分どもが范蠡の心を盡さんとする意を書たのでございませう。

へ、イ、中々感心いたしましたこととござるが、昨年(明治二十一年)秋頃の新聞に見へたと申す

すが、其高德といふ人は、常磐津の關の戸にある

墨染櫻の幽霊の様なもので、烟のやふお無一人

だといふことを聞きました、左様でありますか

先生

それは詰らんこと、去年重野編輯長が、ソナ事を

を言ひ出したといふことが新聞に在たれども

商人

拙者は不同意でござるが、御尤く、無といへば無い、有るといへば有ること、するが今より昔の事をいふ事にて、其証據

は書物の上の証據裁判で御坐りませう、今神と
 いふものが有るのあいにと耶蘇教信者と、耶蘇
 教嫌ひが論をする様あもので、鯨の頭も信心が
 らでありませう、無心のもせ、あるのもせ拙者は
 宗教のことは構はんが、高德は日本の忠臣殊に
 詩とか語とかをやらかす様あ勇士で、文武兩道
 尊むべき御人と承る人を、無い人だあぞと申は
 日本にの耶はです、無いものを有るといふが當世の
 常にでせう、もしや万一有らた高德様をあい人だあ
 ぞ、申したあらば高德様にあつて見みあせい、ソレ
 コソ墨染櫻の幽靈どころか、堂々たる武者大將
 の幽靈にあつて、芝の能でする船辨慶の知盛を



高田刻

月新

見たやうに、ばれ出す、ばれ出す」と無間斷に論じ
立てる

先生

君は中々の議論家だ辨舌家だ。

商人

私は實際論でござる。

先生

論趣が實に妙々、滑稽が加つて尙面白、併し從來
日本には歴史が乏しい故、眞の歴史を拵へやうと
色々取調べて見ると、ソコデ高德あどが、法人、是は
市町村制にある人、ヤナニ、歴人とも申かあ、否無
形人サ、無形人でさへ選舉權がある、ソレをぼん
のけやうとするのだ。

商人

先生のお説又面白。

先生

君の説が眞に感服だ。

商人 若もか前さん、それが無い人と定まったら、是迄兒島高德の事を書物に載せ、又は彼れのこれのと尊敬したものは、皆反古にあって、偏でグスナ。

先生 マダ、楠正成の櫻井の驛、ソレ子別れあとも無い事だといふぜ。

商人 ハ、又又驚き入たこと一体全体ソレテは日本、のよい事は皆嘘、皆嘘、ソレテは日本の紋切形忠義とりませう、困た話、ソレテは日本の紋切形忠義といふことは立消へになりさうだ、私は不服々々、といふ話は、目を剥き出し、嘴を尖し、臂を張り、大音でやッて居る。藝者の小花は花の時節で最負の御客が問ごとく、に

居るから。兩人の聲高德の乗調子ある話を好機會として、茶屋女ばかりに酒の熱いのを運ばせ自分は襦袢を隠して、八重一重花も臍の薄化粧、あど、三線あしの話雑りて浮れてゐる

先生 藝妓はさうしたんだ、
茶屋女 只今鳥渡。
商人 ナニ、先刻から見えねへ、兒島高德は是も脱ぎに

女 旦那か芝居ですか。
先生 これは、妙妙飲める……

浅草の観音

「ア、燈明、観音崎、瀛船の進む音はトット、ソコラコ

に本牧の鼻が見えるかといふ中に内海に入て品川灣、端舟
 に下りて品川に上り、瀛車に乗る、新橋、新橋の走り聲を聞く
 は西國から板子出島は、靈岸島、ヨ、一五重の塔、高ケ一か堂
 がメー、ルワ、浅草の觀音様、ダンペー、瀛車の笛、ヒーと鳴る
 と共に上野へ着く、是は東國から五宿の宿は長ふゴイスナ
 一、今少しで新宿へアキヤすか、是は名に負ふ甲斐あまり、ツ
 ツツツ馬車の喇叭。是が現今昔は心づくしの海山、越て遙の
 旅路であつた、今ハハヤ東京へ着くと上等は洋服屋
 吳服屋、又は古着屋へ車で八錢、歩けば錢入らず、中等は中
 又は上等でも下等は勿論、柳原、イヤ芝の日蔭町、御望次第、鳥
 渡行て馬子にも衣裳、帽子、から靴、或は疊附、或は晴雨と着替
 へ穿かへ冠りかへ、箆頭もスツパリ狭み、温泉摸擬の水井戸

の水で、コヤクスリムキ洗た上では、時候のお花見と出掛
 ても、厭て居さへすれば江戸子、ドッコイ東京の人であるか
 田舎の人であるか、一寸分りません、明治維新以來、四民同風
 智恵と金さへあれば馬車腕車に馬鹿にされず、茶屋旅宿屋
 に見けあされず、有難う御最負と尊敬し奉らるゝ。今日の日
 本は、東京の者が地方の官吏工業を務め、田舎の者が東京に
 て立派の官員を勉め、書生が出てくる、出店を出す往たり來
 たり、遣たり出たり、東京と地方のつゝさませ、昔は一生に一
 度江戸見物に行く、今は一日に一度用達しに行く、都鄙同觀
 の世の中である、から皆様御勉強あさい。
 皆様御勉強あさいといふに附けて、またく今から注意を
 して、御用心願はねはあらぬことを話させう

東京の腕車馬車荷車と人の走り廻り廻り廻り、ゴチくす
 るのは皆様御承知のことであるが、あんど能く過ちの無い
 こととありませんか、これを田舎の荷物を牛に曳かせ車の
 上に牛方の晝寝、腕車がきて心棒と心棒がガチリ馬車が逢
 ふことの小供を叱り斃すなど、これらと比準たことあれば
 東京の通筋では車と車がガンガツシヤリ、突當た突飛し
 たの喧嘩が無間斷で負傷人も山をさしませうが、左様であ
 りのは、唯銘々が門口を出ると注意し、瞬間も間拔の顔をせ
 あい、右から来さうと思へば、左へ避け、少し頓馬の顔をせ
 譲るべきをドマ突くと、間拔の耻かき互に抜からず往きか
 はすので過ちがあい、然るに田舎の街道では行きありで、往
 來は何に廣い、かれは勝手に歩く、お前は避けたい方へよけ

多と、互に勝手我儘の癖を守てぬるから、突當るが當り前、打
 當らんのが間違位で、いかにもあんばんたんの道中が多い
 が、此人駄軀でも東京見物とくると、中々性根が違ッてくる
 今、外国人の雜居前で太古の世の中に住むでぬるやうな人
 の心も、今に外国人が雜居してゐることにあると、丁度こん
 なものでせうから、皆様必附ぬ人には御注意御用心を……



御開帳く、供養に縁日大施餓鬼、神樂にアーメン馬鹿ばや
 し、祭典てこ舞ヒウドンチャン、秋はともあれ先づ花の頃、當
 附込合ねり立てる、東京といふ處は平生でも、今日は庚申様
 明日は酉の日、今夜は地藏、翌晩は稻荷、今度は新の節句、今度
 は舊の節句だと、花を立たり餅を備へたり、日毎、夜毎にやつ

てめる社會が多い、尤も八百萬の神、八宗九宗の尊崇佛、鎮座
 道場ましまし、まことあるし、殊に現今は又外宗の出張もかは
 すこと故、左もあるべく又、銘々思ひく、信仰する人の多き
 場合には、斯くいゝはやし居る人の多きを見うくるも道理
 あり。

淺草の観音の繁昌は、人の日々出るのを算へ、かくも東京の
 第一、日本の第一、花の時分は又驚いたもの、其佛體は僅に一
 寸八分だといふが、小さうても人氣を集むることの大ある
 は、感心だ、ソコア内徳外物に及ぶといふ、佛の三十二相の中
 白毫相の光とも申であらう、實に無量無邊福德の利は感心
 左様の人望があるからこそ、それに附屬する雷門の敷石ま
 で感心いたす、百千萬億窮め盡す可からざる人の土足に踏

れても、あんども言はずに堪忍して居るのが感心、堪忍袋の
 緒の張いものには、此石を粉にして、お守りにさせたらよか
 らう、とは編者の考へ、獨信心に花見を兼ね参詣にて、仁王門
 の國を跨ぐにも、是も韓信の頭を下に跨がんとする心持ち
 本堂へ昇る階、是は石より柔和の生れつ木か、とソット踏
 登り、毘沙門をば子孫長久を祚る爲めに上げ、堂を廻ると虚空
 遙かに音樂の太鼓が鳴るは、歌舞の菩薩のそれあらで、矢場
 のドーン、御参詣の奥様、お嬢さん、天から降た天女でも美人
 でも、鳥渡一目に早取の寫眞もあれば、生人形もあり、海外ま
 でも早渡り、是は日本國粹の、アリヤ、の輕業もあり
 足藝、鳥藝、力持、大がらくりには、大仕掛、森羅萬象、種々雑多、極
 樂淨土を現世に觀せ、家鳩も羽を伸ず放生會、大慈大悲の觀

音様と歩いてゐる群衆圍繞、まさ木の桂すゝし路、モシク
あまたの帽子ではございませんか、と喚はる、聲に後を向
いて見ると、古びた駄帽「ハ……私ので、と頭を擦り、手を摺り
有難う、と恭敬禮拜、是も御利益の一ツ。



私は田舎の者でございませすから、何も彼も東京のこ
とは知りやし、チーから、女中よろしくお明しあッ
てくださりやせう、

と最早七十ともいふ年寄が、二十二三の姉さんに、何か物を
問はんとする体は、門跡に近きある茶屋で、此老人は田舎の
堅氣の老人と見え、年が寄ても生息に老練であど、氣張て
上等の處へ上るでもあく、年を取てゐるから萬事質素にあ

ぎ、極濟しこんで、下等の處へ潜まんとするでもあく、鳥渡
手輕に、中等の茶屋へ這入た様子。女が、
何ぞ、

と手をつかへたので、老人が私は田舎の前口上を陳たもの
と見える。女は、

ハイ、

といは、あいな前に、お客の様子から、人跡から、身分柄から、此人
は金があるか、あささうだか、氣前の方だか、頑鈍か、悪い人か
善人か、怖い人だか、優しい人だか、そんなに考へるには時間
がかゝる鳥渡と見取て、悟るのは商賣がら、ハイト一言する
内に、老人の前文句は、是は御念入だか、又は戯談だか、鳥渡考
があくてはあらぬ。注意取廻しが上手にあつて、お客のすッ

ぱり御意に叶ひ、上客にも、中客にも、下客にも懇めらるゝ様
にあるのは、氏もあるし、育もあるし、氏より育てが、肝腎だが
先づ本人の心意氣が第一、ムーこれは田舎もの、の東京見物
で、松子を能く御存じあい併し田舎の人まれども、是は空花
ではある、賈のある花と考へて、

御酒を差上ませうか。

老人 ハイ肴をさにか。

女 お肴は、さしみに、てりやき其外にもございます

さにかお好みのれ肴に致しませうか。

老人 さにありとも宜ふございやす二ツばかり。

女 おさしみとさにかにいたしませう。

老人 願います。

女 承知いたしました、
と立て行き、早速盃洗に一寸漬物で徳利が出る膳に肴が乗
り、老人の前へ出る。老人盃を取て、

頂きませう。

女 お酌……

と種々の低聲。老人三四杯、トくやッて、

只今は櫻の眞盛りで、お茶屋はお開しうござい

ませう。

女 有難うございます此頃は、天氣が續くのでよろ

しうございます。

老人 花の盛りは上野杯といふ處は、人過ぎて、氣弱の

年寄あきでは花を見あがらどこで一杯のみた

いと思ふても叶ひやせんから、此邊がよかろう
と思ふて寄りました、それから淺草へ参りませう
と思ふて居ります、蕭閑てめて田舎のものには
極よいて……

女 この邊は公園をど、ちがひまして、沓雜はいた
しません。

老人 東京見物は、花の頃に限ると申しますが、實にさう
であります、あ時候はよし中々賑やかなので
ございやす、私は此年までの間に、たつた二度江
戸見物に参たばかりで、昔とは大層の違ひで
さいやす、東京に知り人のあるでもなく、又連れ
の者も今日は芝居見物に参りやして凄しいか

ら、氣儘に一人で樂で見物いたすのでござりや
す。

女 眞に結好のことでございます。

老人は先刻より、時々煙草を吸ひながら、煙草盆の清潔にし
て、灰燼の中の富士の高根、雪の如き灰を冠りたる火の保ち
よきを見て、感心しあがら、

老人 此炭は櫻炭と申か。

女 左様。

老人 櫻は仰の早い木で薪にするが徳用だが長命は
せぬ木であります、併し野刀をにかで皮を立
に割と命が長ふございやす。
女 毀傷をつけると長く有ちますか。

と女は、是は怪異らん、と櫻を人の体にて比べて考たか、女が判
断に惑ふ体、これも道理のある此女の身。莊子が散木の説を
あしたることにつけても。

老人 肴を、あにか一ツ願ます

女 あにか鳥渡いたしたものに致しませうか。

老人 へい、あんでもよろしうございやす。

女は又肴を取りに行く。老人は獨飲むでぬる。肴がくる、れま
ちどうさま「老人また飲む。

女 お連れ様はどちらのね芝居へ。

老人 吾妻、……吾妻座とか。

女 これは小芝居でございしますが、中々最負のある
芝居でございします、真に大入だと申ます。

大きい物だと評判して、ステキに懇め、小さいものでも非常
に最負をするかと思へは、又盛んなものでも一口頓着しを
いし、聊の物には目もくれあ、いやに好き嫌のある原素に
多料あるは、東京の人の性分であるが、此姐さんは原素の用
ひやうが上手である。

老人 よい芝居か。

女 よい芝居で……これからは織でございします。

老人 そんなら今から、いきませうか。

女 いらっしやいませ。

老人 是から、人力車で何程位。

女 四五錢かと思ひます、申付ませうか。
老人 頼みます、序に堪定もといふ。直ぐ附がくる、老人田舎者

あから、花の氣節花の極あ女の進めに浮いたのか、調子がよ
かつたのか、堪定の外に女にも拾銭の二十錢遣す、女は素よ
り、舌感沁にて、車屋さん「ハイよろしいか子、車夫御茶屋は
存じて居ります。一同毎度ありがたう……」



半洋先生半漢先生を今月に訪ふ、一禮は相済み、

洋子 ナント先生此花の時季に空々寂々と内にばか

り引こんで居ては例の胃病か、肺病か、最一ツ引

つて脳病御縁が有りさうにありますが。

漢子 實に肺肝を指すが如し、雖然僕は此頃煎茶會で

一興を得、益裁會で一興を得、又古書畫展覽會で

一興を得、又昨日も一興あり、春の興味も十分、そ

れこれ運動もありて病あどには御疎縁の方だ
と思ふ然るに、半酔半醒遊三日、ソレテ不足で爛
を執て夜遊ふの社中が、代るく無暗にドウダ
くには死を閉口。

洋子 先生は節酒會員にませあらんか、又婦人嬌風會

へませ嬢さんを加へぬか

漢子 加はらうとも思ふが、マダく、殊に花の盛の東

京は節酒會も、嬌風會も、上等社會等は知らんが

下等社會は行はれんよ。

洋子 花の時であいとて下等社會は急にはいかんの

さ、併し時ぬ種はいぬよ、それはさうと花屋敷

の高い盛から、今日の淺草公園の人を御覽あさ

らんか。

漢子 我輩は昨日回向院の相摸を観たが、若手に宜い角力がある、小錦あずは中々。

洋子 先生ドヨリで、けふは力の抜たやうあ顔だ、あんど今日は我輩に交際あされ、サ公園へくこんち長閑の日は稀た。

と頻りに促すは何の目的あるか知らん、

漢子 ヲ茶を一ツ、海茶にしませうか。

洋子 時に細君や、お嬢さんは、

漢子 公園へ矢張、ソレヲお留守。

増上寺

コウ今度新富座の御所櫻を見子一か、近來時代ものが大流行。

よー役割はどうだ。

昨日濱町の旦那に聞たが、菊五郎のお淺で團十郎の辨慶ステキに宜イト。

娘は誰だ。

福助。

よかろう、が些と大きい。

ケレド、侍従太郎が、左團次、花の井が秀調だぜ。

選抜だもよからう。と話してゐるは職師で。

お早う御坐います、今日は紅葉館へお出掛あさいまする。

参ります、観世の櫻川がよいと思ひます。
梅若のワキモ中々よろしうございませう。
ハ、ア私も参ります。と話し合ふのは元旗本ともいふべき斑白人。

これは朝湯の板の間、二階には當世の紳士ともいふべき一人湯あがりて向か胸の中に算入の体東京は花の頃は、人の心がほげく花の咲くやうに、ソレ花ヤレ花實に鬱朝天だ話も相談もまつまらなくって仕末が附かぬ、それはさうと昨夜……花を纏頭、是も花といふか、惜氣あくやるのも花、ム、近頃御散財、ともいふべき、子柄女が脇からソツと客は厭て榮を作りあがら、手をソツと出し、櫻湯をとる、此姿が姿見に寫る、成田屋アと懇めてもよささうさ、さつぱりした

紳士。紳士を横目にした、女を「新駒屋」とはめすに、かつうやるあ、きざだ、と陸焼体に見ゆる、職師を「音羽屋ア」と懇めすに。ワキから「よせばいひ」と又一人思ふは奉書四ッ幅であ、印刷局御用紙、透して見ても巾のきく方の御隠居さん、繪作りの榎子階をトントンく



今日は四天王が探出します、此四天王といふのは何か武張たので四天王あらば、武門時代の人物でせうが、當世ですから、時計師も、煙草の製造人に、銃砲師に、羅紗の職工で國を出る時キヤア、ナイヲイの友張、ひっくりかへりて有たが、イザ勉強と一生懸命に刻苦したものと見え、御厄介か頼み申を

腕とき揚げ、今は主人より權式が有て、親方明日は間隙入がある、といへば主人が「こつちから代人をやる」といひ、旦那ンナ難い仕事が出来ますか」といへば主人が「是非勘辨して適て呉れろ」といひ、旦那こんどは數日の勉強で一日休日をといへば主人「據ろチ」にて給金も奏任官と取組の番附無論半人前あぞではねへ立派の一人前の四人が時々打寄て話し合ふ處が其腕前が四天王ではあくッて、外に四天王と呼ばれる、長所がある、時計師の金藏は天獸羅が大好き、煙草製造の煙太郎はすしが大好き、銃師の鉄五郎はしるこが大好き、羅紗職の黒助はそばが大好き、何れも又此四ツの看板は開けたる場所だけ墨黒々と筆太に大書してある、其看板を見るに腰を抜かすといふ、皆一熟張り専門の大食漢

で、これを四天王といひ、時々此四天王が喰ひ合をするが此外に一人漁船の早太郎といふのがある、これは牛肉が大の好物で、是が這入った時は、五人男の出揃、ムーとくると大變だが、今日は早太は、朝の中據あ用がある、今日を延しては花に後れをとるといふので、イヨ四天王でお花見と来たから一番面白く出て立て天晴驚せてやらんずものと何れも五六日前から非常に労働をやらかして、約せし其日は時間の前、後今日は今日は今日は、と銘々何か一物を提げて、打集たるは金藏の主人の家で、是は外の職業と違ふて、住居か鳥渡手奇麗であるからといふので、こゝへ打よると、方角はどらしやうと發言する(異口同音)

金藏　かれが原案を出さう、先づ九段の坂を手始にし

て招魂社の櫻を脱て、こゝで一服煙草、お茶はお
定まり、これから、愛宕山へ登りあげて、こゝで銘
々持合のを開き、ドンが過ぎても持合の一方と
し、食物は一切やらんのだ。

鉄五郎

ッレデハ丸で虎列刺を病だ後の様だ。

金藏

ナニ虎列刺の後で瓢たんの取をやるものか。

鉄五郎

サウカ。

金藏

ッレカラ芝の公園だ、こゝで銘々の十八番をや
るのだ、原案至極よからう。

煙太郎

大躰は同意するが、第一の晴れをやる場所を取
替たいよ。

金藏

取替たいではいけず、修正したいといふがイ

黒助

我輩は原案でよし。

鉄五郎

拙者は煙太郎氏の修正説に同意する。

金藏

ッレデハ大躰は一同決した、修正の處を論じた

まへ

鉄五郎

二讀會だ、よし。

煙太郎

二讀會だ六ヶ敷ことをいふ。

鉄五郎

君は會議の事を知らん、大躰を決するが一讀
會で、細く討論するが二讀會だ。

煙太郎

知らなくってどうする、食事の芝公園を新橋と
修正したら。

鉄五郎

余は品川に改めたし。

煙太郎

品川の論甚不可あり。

黒助

二人の説利あるやうあれども原案がよからう

鉄五郎

我輩品川を取消て原案に同意。

金藏

然らば起立を評せん、一同瓢たんを真直にして

決を取るべし、原案の決を取らん。多数によつて決す。三讀會はお零し。

是から一同腰のあたり彼の長大ある一瓢をぶらさげ、日

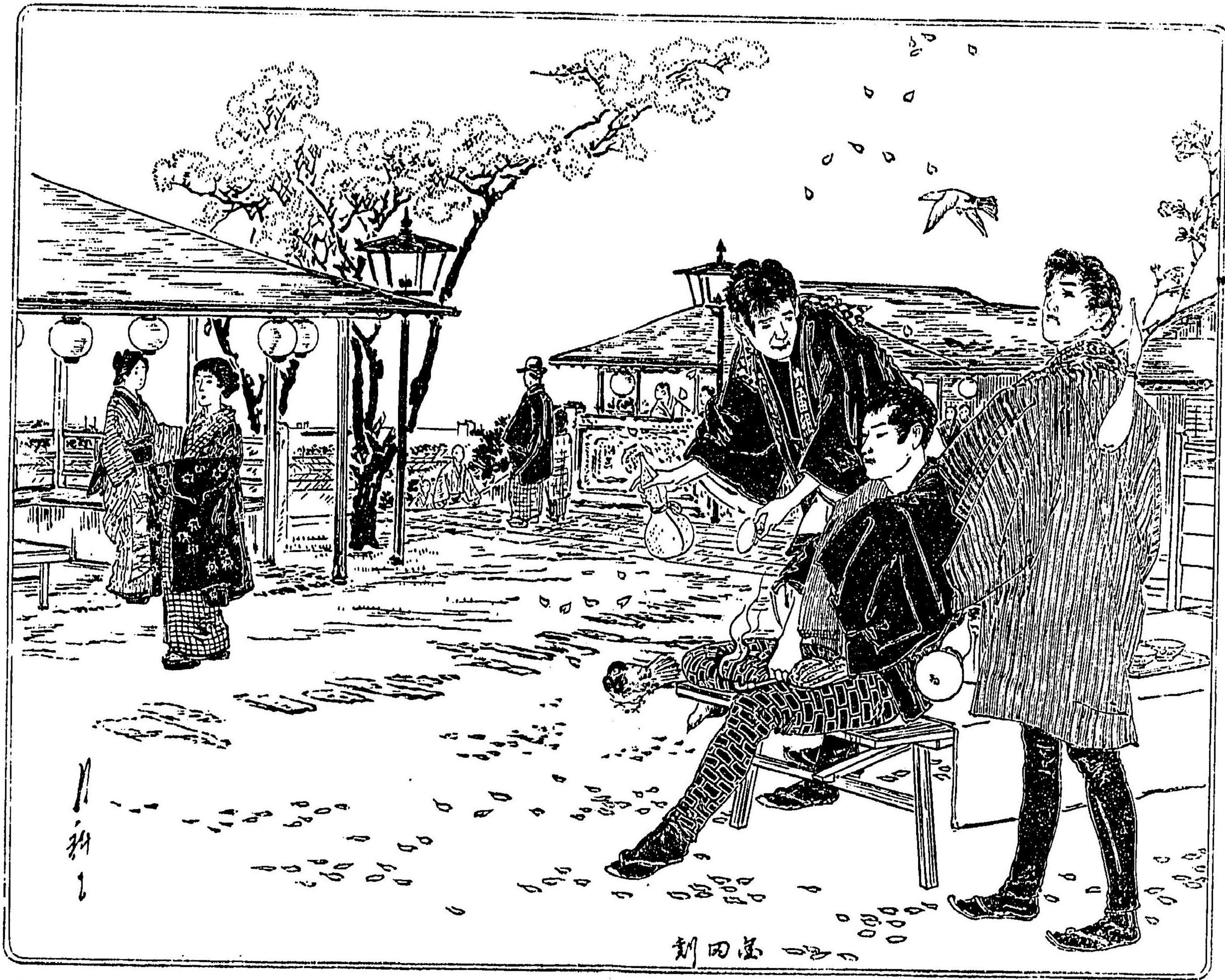
本橋の袂から九段坂を見めて威張出して、此九段坂はお

茶のこさい、招魂社の裏手の若櫻を横目にして、愛宕山

を目掛けに進み愛宕山もヨイトコナ一の一聲に登り上げ

八百八町見澄して、ア、日本晴例の美しい處がよからうよか

らう、こゝにて素酒を各五六杯やると、空腹にグイといッた



新田

ので、孰れも顔が葉櫻でもない、眞の櫻色(中)には葉櫻もあらうか、サ花を見やうと彼方此方櫻の下群集の人々に遠慮もなく運動する。

黒助 櫻の花が動くやうに見えるぞ。

煙太郎 花が動く、散るのだらう。

黒助 ヤナニ、散はしねへ。

煙太郎 酔たあ、サ是から。

鉄五郎 この櫻の根へ腰を掛けて、今二三杯つゝ飲むべし。

銘々グイ／＼やッて、是からと芝の公園へドシ／＼進む。今日は人の出かたが多いので公園へ行く間にナンダ静に仕マ一「ラット危い」ドッコイ大夫丈「ナンダまア見チ一」ペラ

ンメ間拔「親分様子がいひ子」是は親方お久しぶり御機嫌宜
うの歩き方にある、殊に始めヤッセと歩いたので段々足踏
が遅くまり、公園へ着た時分は既に午後四時サドウダ一休
息と揚弓店へ這いこんだが、銘々「サドウ」サドウダの勢はか
りで第一目的の四天王をやらうといふ氣にあらぬ、揚弓店
の姉さん、

お揃いサー、

と茶を汲て出す、盆の上で指と茶椀が相撲ごりをする、盆の
縁から茶がこぼれる。

煙太郎

議長、サ始めやう。

金藏

君の十八番すしケレヒいかんく。

黒助、鉄五郎も「いかん」「いかん」にて丸で矢玉を幾ツも喰た猪

の機にあッて、とうく揚弓店の狭い處へぶつ倒れたが、底
が「繩美華水引那須のが原の弓とりではあゝ、矢とりの姉
さんの事であるから、大野屋にしませうか、見晴にしませう
か、ム、……見晴にしませう」と一同見晴へ揚り込で仕舞、こゝに
て又飲めると飲むだが、平生衛生上の片端位は話にもして
ぬるし、最早新聞にも「ラホラ」見えるから、今日は四天王十
八番の實行は取消とし、飲めるもので今少し、といひ乍らや
ると煙太郎は、

コレく僕が一ツ狸の腹鼓といふ唄を歌ふ、ナント
聞きたまへ。

一同 やりたまへ。

煙太郎 今頃が、ボンく、月の見所だ、ポテチリカラツツ

ボウ、イヤハ、ツ、テン、シヤン、チエコンリウコン
一同ハ、アこれは面白、ヒヤ、能く、中く、和漢亂馬鹿
をいふも、我々の舞樂だぜ。舞樂だか何だか和漢亂ワ。ヤイ、
次郎家者、よく聴てオ、ルガンよい。しやれか、太平樂をやッ
てぬるア。ソナラおれが都々逸、僕が甚句あぞと、銘々の隠
藝がで、終に地がねの腕自慢の度に達し。

金藏 諸君、諸君、諸君の業体より、僕の業が金モールだ
らう。

黒助 何拙者の羅紗が幅を聞かせる。

煙太郎 馬鹿をいふも、我輩の煙草の烟で捲揚て仕舞。

鉄五郎 ソンナ女のせりふのやうあことは、よせ、面倒だ
かいらのツドンが天狗だらう。

と討論會が始まり、聲が高くある。と顔も唐紅で塗たやうに
赤にまッて居た、涼船の早太郎が客に誘はれて、隣席に
ぬたから、ヤ盛んだあと客と一齊に這入て來た。

金藏 コレハ面白處へ、君聞たまへ。

早太郎 今聞た、勝敗が決めぬやうだが、僕が勝をとらう
何をいッても船がなくは、諸君の腕前も役に
立まい。

鉄五郎 コレハ感服だ、が其船は寶船か、蒸氣船か、何の船
だ、

早太郎 ナンデも船だ、どうだらう、

といふと早太郎の側に居た。客人が皆さんお負あさるな私
が早太郎氏に一本参ります、何も彼も人さし指で自分の鼻

を指して)お客があくてはいけましますまい」といふと一同「君君
實に感服々々」それあら、此お客さんが、諸君に一言「明日から
のお爲めに申上るが、皆さん方其製造する品々に、粗製をな
さらぬ、又約定した時間を違へんやう、皆さんの腕の花を
か見せあさい」四人一齊に「君は何れで、私は日光邊で」といふ
此時増上寺のポーン、イヨ大當りにて一同腕車

飛鳥山

總て物品に飽華かの模様を附くるは、地球上皆同感あり、斯
は、開闢卒先ある國が其式を始め、後進の國もこれを同じく
喜びたれはあり、元來みやびはやかの物を寫し見んとす
るには、しかす天然自然になせる花を寫さんには、社會は又

花に花を加へ、これを見て貴むの習慣をなせるものから、婦
人衣裳の模様、兒女の簪、其簪に生花作花をあすあど、西洋と
いひ、東洋といひ同一轍に出たるも亦感ずべきことにそあ
り。

君があさけの假寝の床枕かたしき夜もすがら。コロ
リンヤン

障子の中琴の音は奥まりたる座敷やど近くうつして、拙し
かひもあく待遊にのみにはふ花かあ、佳木、珍石、取ませの庭
を隔てし廊下傳ひ、バクくく一人の女來り、手をつかへ障
子をそつと開けて、

か嬢様エ、只今より先夜のお話の飛鳥山へ、旦那様が
行ッしやるによつて奥様が御支度を遊ばせと仰せ

られましたか。
そなたも行のかへ。

「ハイお供をいたすので御坐います、うれしいこと、サ
お早くお出遊ばしませ。

何で行のたへ。

旦那様とお馬車で。

そなたは。

私は腕力にて。

「サソレナラ、支度、髪は今朝結ふたゆえ支度も早い。

トモト、バサ、奥様の居間の方へ行く程、あく花のや
うある支度も整ひ、お出掛といふは華族さんか、當世勅任位
の處か、支度が早いお手帳。そんなことで、ハ、アレお拜み

アレ天子様が御馬で「ナニアレハ、徴兵の大將だ、イヤもった
いまい、あの中に天子様が御坐る、ソ、カナそれでは能く
尊拜もであつたが、と長くも龍顔を咫尺の間に拜し奉る大
開けの御世あり、三十年以前の時代では東の藩統、であい公
方様の御成でさへ商賣休み、戸、戸、隙穴があれば目張を
するといふ、瀝の温度育でもするやうであつた。



嫁菜たんぼ、すみれ草、年越草に、壽草、柳も風にさそはれて
緑の色を増鏡、うつらう野邊に飛ぶ蝶は、上に下にと浮き沈
む、鶯はもう人あれて、往き來ふ人に恐れもせで、自由に囀り
かけまはり、人の籬や、人の園、林を傳へ寺の門、醍醐の經の法
は、華經、馬頭觀音、南無阿彌陀、右は板橋、左は王子、苔のむした

る道しるべ、見るもあつかしかたみ草、植生の小屋もある田舎こそ、熱鬧に咽ふ呼吸の人々は、ハアい、といふ心持、究理學者や醫學者に聞するも悟る井戸端會議、裏店小店の老婆さんも尙駒かへの氣晴しと昔の姿武藏野の、還るも床し飛鳥山。

パンパンパン、パタパタパタ、兵隊だく避けてく「ハ、ア馬が崩つて、ピタピタピタ、官員さんかどうだか華族かあ別當の足の揚方がうまい。シリシリヨこんどは自轉車續くあく避けてめては歩くことが出来ぬと斜に歩み、横に歩み、一尺進み、一尺退き行く人々「ハヤウく」ヨ、後から又馬ア……危あいと、いふ中に「ピヤウ」の一聲は掛聲だか馬の風を切る音だか馬の足、小供が横倒し、馬は半町も先き、小供

は、ま赤の衣裳が土まぶれ、女が「ハア」と周章て走せより、傷を認める、小供が大音で泣く、傷は分らぬよかつた、頓馬を兒た子、笑はれますよ、とは人中で育つる子と其母と見える。

ピタくく、パクくく、ジャリくく、ヨコ、ダ。くこ、が濼澤だらう。イヤ、濼澤のは最少し先きだ。

こ、は鍋島の別荘以前は小松彰の別宅だと、二人の別當が車駄天に飛ぶ。

「コワイく今少しで車に、とキヨロく、ピカく黒塗馬車の前で立廻りをするは、菅原の梅王、松王、櫻丸ではあ、遺傳でもあ、車馬に淘汰のあ、田舎の見物人。



回頭 世上設紛紜敢以毀譽付白雲天下英雄纔屈指平生知己猶逢君林梢風歛鳥聲滑欄角日墮梅氣薰自戒宴安如三鳩毒一從來治國要勞動と書生の吟聲

△ 誰の詩だ。

▲ 鍋島閑叟が水戸黄門に呈した詩だ、又一調子聲を張り揚げて戒君勿見黒田花と木杖を振り廻しあがら。

△ ソレ横手の圍徑から巡查が。

▲ ナンメ驚愕したアレハ粒々辛苦の百姓だ君我輩は法律上の罪人とあるとも道德上の罪人にはあらぬ。

▲ ナセ道德上の罪人にあらぬ。

△ 今吟じた良齋の詩を守てゐるのだ。

▲ ソリヤ誤解だ、女や、酒や、花や、月あにかに心を奪はれず、品行を慎しみ勉強第一として、三十年修行、といふ詩を守るのハ感心だが、今こゝに巡查が居ぬと、高聲をやつたのハ、ソレハ道德上の罪人でのないか。

△ 否否、法律上の罪人の部だ。

▲ 今君が吟じた詩の鍋島閑叟も英傑で有たが水戸黄門は英傑であつたナ、閑叟が壯年の頃初めて水戸を訪ねた時終日話して居たが甚だ泊過ぎた翌日閑叟が思ふに、儉約とはいひ乍ら

餘りも不敬ではあいか、聞及んだと違ふて、通常
 の人物であるか、これは重ねて慕ひ訪ふべき人
 物ではあいか、と思ひ辭し去らんとし、玄關に出る
 と水戸が駿馬を備へかゝて、折角の御尊來あれ
 ども、何も献すべき品あければ、馭馬に候へど
 是を献するとてやつたさうだが、英傑のすると
 は、感服ではあいか、今の書生も少し計りは此了
 簡が持たせたいよ、平生は酒池肉林を企望して
 交つた朋友にも、イザ頼むとか、一朝袂を分たん
 とする時は、顔を合すも御免、ソナ義務はあいか
 の不利益だの、とノンキのシヤアが多いが、我輩
 は平生極々節儉主義ときめこんで、イザといふ

△

時は親友の爲めに應分の力を出さうと思ふよ
 言ふべくして行ふべからず、人を欺いてもやら
 うといふ今日だ、馬鹿正直に自分粗食を食し
 寒苦の思ひをしあから、人の三寸一枚の遣方に
 任と其増長する、糧を贈るやうなことが出來す
 る、親父の送る學費を月々何程か貯蓄して、人の
 事は措き、我か不時の準備にせやうと思ふこと
 できへ出來ぬよ。

▲

君はさういふ心であるから、時々困た、困たあど
 いふではあいか、僕を因循といふか知らんが
 我輩は常に節儉主義を固守してゐるから、水戸
 翁あどの心を以て朋友には盡して見たいと思

ふのだ。

△ ナーコ、水戸翁あまは華族だから出来たのだ。

▲ 華族だから出来るとは、ソレハ君水戸翁を知ら

んのだ、水戸翁は一世の英傑だ。

△ ムー、僕がやられたく、花は櫻木、人は武士、水戸

の隠居は日本の義士、發して萬葉の櫻田、櫻田。

▲ 櫻田、櫻田で思ひ出したが、こういふ歌がある櫻

咲く花の浮世を下に見て、心高くもあくひばり

かあ、梅田雲濃の歌だが、彼様の氣位で居あけり

や、いかん。

ふらりく、歩いてゐる、兩人の書生は、氣質に大差はあるが

同窓の交誼の厚き互に益友としてゐるは、一寸閑叟公の詩

の話から出ても、こんな問答、此書生は最早、田樂の骨を青山に捨はせぬ、年齢。



嬌弱女を肥大ある男が、「ドッコイやらん、私はイヤ姉さん助

け船助け船、ムー、こいつもやらん、ワット、其手は喰はん、コイ

ッは仕舞たが、こッちは放さんぞ、旦那酒ですか、「ナニおれが

喚ふ、酒だ、」妾が持てきます、こゝを放して、「ナンノやらん

」エー、困ります、と振り放して、逃んとするを、やらじと抱へ

る、途端手の緩みたるを、幸いと、引潜って北げる、こいつも仕

舞たと逐かけ廻し、椽側傳いに二席三席過る中、少女は那邊

へか失せたりけり、「コリヤどうした」と彼方を探し、此方を探

し、演劇あればギーと廻る所、此方の襖荒々しく引明くれは

方丈様、コハいかに徒弟が一人附き添ふてぬる

△ ヤか久振り。……

○ コレハ、吉野屋さんでございませうか。

△ ヤ今日は彼様に失敬……

僧侶は何やら知らねども、

○ 御愉快でございませうか。

△ 花見の頃は彼やうの爲體といひ乍ら羽織の縁

をさほして坐る

○ 結好でござるサ此方へ。……

△ 方丈様方か花見にお出あされて……お楽しみは心

ざいませうか。

○ 誠に楽しんで思ひますナ。

△ ソレハ何かお楽しみでございます、私共は花見に

くると酒が第一、酒で御機嫌にあつて、そこで女

とからかう、うれか花見の一興であります、酒が

あくては花見のやうであし、女があいのも花見

のやうでございませぬ。

○ ソレハお花見に添へての興を助けるのでござ

いませう

△ イヤさうではありません、花見に来ればヤ咲た

の一言で、あは酒と女でありますからソコデ

方丈様あきのお花見は何處がお楽しみにあるの

か解りませぬ……

○ 目で見て、心の害にあらぬは花であります、花は

美しいものであります。人が喜びませう。佛に花を仰山捧びます。生花もあり作り花もあり。天井も花。天井蠟燭に花。蠟燭みごとあことであります。あ、草木の花には、これを咲かせる幹。其又根、感心でありますか。

△ ハ、そアんあことを承はると、酒が少し醒めてきさうにありました。

○ ヲレハ、お坊び申たやうあ、緩りと又お話申ませう。

△ 今日には暇申ませう、と冷たる茶を、喫し去る。僧侶は、拈華微笑、忍癖の袈裟に替へたる長合羽の袖よりソット手を出し、茶を啜りあがら、古歌

を小聲に、花見んと群つゝ、人のくるのみそあたら櫻の科は有ける。



飛鳥山は今真盛りのもよひ草、八雲立ちぬの雲客月卿は花の下、花より圃子、甘酒進上の坊ちやんは、草の上いと面白く遊ひつれたる種々様々の人種の中に、威張さうな老翁、其名は九四郎と呼ぶ。卑怯さうの野翁、是は東八と聞く。此兩人が何かやッてゐるから、近よりて聞て見ますと、東京といふ所は至つて不風流の處だ、太田道灌以來開けた處と見えて、古歌にも何にもよりどころが「あ」と謔きあがら。

九四郎 東八さん、おいさんが一句讀みました。
東八 何と讀ましやッた……

九四郎 もろともにも楽しく思へ山櫻けふ九重に匂ひぬ
るかあ。

東八 シリヤ、百人一首ではあいかあ。

九四郎 ナニサ、是は二人一首……か公家様の焼あほした

東八 面白く、お待ちあさいよ……コレく九四郎

さんからあの一ッ聞かしやれ。

故郷を遙るこゝに來て見れば花の都は盛むあ

るらん。

九四郎 シラア三十三番觸れ廻る、順禮の歌ではチーカ

東八 ナニサ、からあのは都のて詠花だ。

ハ……と讀てぬたが、短冊のもちあいもあいと見え書きも

せず、唯ヒラくの竹の皮を置き去り。

ア、ア眠り過ぎた、欄干へ月が「といひ乍ら煙草のからを拂
う、お手が鳴るよ」……「勘定御ゆるりと緩りと眠りま
した」といひつゝ、欄干よ親づく向ふの高手の方から夜櫻の
中をくぐつてくる風花の薫りがありさうで、月の臙は又格
別、ア、宜い心持だ、秋の夕草むらに聴く蟲の音、コレモ宜い
が一刻千金とは此宵のやうの春であらうと眺むる此櫻は
海老屋の二階にて、此人物は新聞記者と假定いたす、何か腹
の中、の原稿、これは後回しとし、今晚は八時の瀛車、上等否下
等へ摺込で、土産に白石、斬でも種を取らうかイヤく寝惚
顔で拐賊にでもか、ッてはつまらん（と帯のあたりの時計
に氣をつけ）中等とす可し、今夜あんず吉原は盛むだらう、花
郭の中は萬燈會の不夜城、種を得らうか、と考へてぬる胸中

を推測して見ると、此記者先生は、續きもの、受け持ち即ち
小説家と見える、虎穴に入らずんば虎児を得ず、我が事を人
の事のやうに書くも筆、人の事を我事のやうに書くも筆、善い
事を悪いやうに書くも筆、悪い事を善いやうに書くも筆、筆
に書かすれば何んでもかける、海の水くし玉の池、どうせう
か、行ふか、止めにせうか、彼様の時の其心寫して見たき幻燈
繪、止めせう、併し吉原の櫻、これも見ざるべからず、一日の
花信亦報道せざるべからず、とは記者先生の考へ、

編者は此筆の場合に至らば、吉原のことは御預りに
して、寺門翁の江戸繁昌記にか任せするが、翁もペン
キ塗とランプは御存じか、あいかから柳此翁、に是も東
髪洋服高几は御承知が、あかつたらう然ば、則文學粹

士、しこれは観客諸君にか任せ申がよろじからう
が、若し編者に御質問とあれは編者は答申申す
御覽にあるより御覽にあらぬが御安心と申す。

向島

「ようくえらい物ちやく、どでれます、こゝいゝ風景は那
處にもおまへん、是はこれ嵯峨やか室の花ざかり、こゝはそ
れとは土地かはり白雲淡紅の霞を帯び、見れとも盡きざる
ものはこれあん櫻、數里の機器綾羅錦繡を織出し、胸胸を衝
き、肩肩を撃ち足踏む地を見ず顔を見る人は吾妻橋枕橋邊
を當にして行く人、背を見る人は三圍又は牛の御前あたり
まで行かんとする人、貴きとあく賤きとあく富とあく貧と

多く、一堤の上を押歩き幾千万の人誰か某たるを知らされ
 とも、皆其花見の人たるべきは向島の花見あり。ナンダ
 歩かチーの人の足が止まったヲ、迷子か押すあ、コウ
 く、那處々泣ては分からチー、ナンダ櫻木町々櫻川町たら
 うコウ櫻木町といふもあるぜー、ナニニ櫻川だ巡査は見へ
 チーのヲ、向へ見える直く親に遭はしてやるぜー」



普通のスコツチ服にて、官員だか、商人だか、書生だか何だか
 知らんが、年頃二十七八の男が雑誌を見て、

ムー念力は岩をも通すあらひあり勇氣ゆるむ
 あ心たゆむあ○誠だに陰日向あく勉めあは、助
 けあるべし天地の神○油断より小事大事にあ

るものそ、心を附けよ事の始に○唐の史をのみ
 讀ます日の本、記録軍談絶えず見るへし、

面白い如何にも……
 好にのみ深くあづむは志、失ふたねと兼て知る
 べし。

是は林子平のいろは歌だが。

と讀むでぬる。側に麻裏に三尺をキユツとめ、二子の絆切
 乳隠股引で職人躰の男がこれを見てぬるは三圍の手前小
 茶屋の胡床の上。

ハ、アお前さんは、どこそで一度。
 へイああたとは、ヲ、外國にて。
 左様左様。

私は製鉄の職人でございませうが、七八年彼土で骨を折りました。此頃歸りました。ハ、アそれでは私を御存しであります。

職人小首をかたげて、ハ、ア何處でございしたか。一昨年私がメルシユムの製鉄所を見に入れた時日本人と見かけたから其時か前さんを。ソレではああなたは玉川様、其時の御名刺を今に持てたります、何日かお訪申さうと樂て居りました。

玉川 それはよい處で、私の宅はついでこの長命寺を廻ると直ぐですから、今日只今からた寄りあさい

職人 有難うございませう、そんならお伺ひあからか供申ませう。

二人は茶亭を出て、ボク／＼ピタ／＼三圍稻荷の北の通を東へさして一二町行くと、生垣に小さいの門、玄關も鳥渡工合よく、

玉川 サア此方へ道入あさい……

家僕 大層お早くお歸り、先刻櫻組の手代がお靴の手入が出来たと申して持てまいりました。

玉川 ムー。

職人 是は御免あさい、と小腰あから道入る。玉川これを客間に迎へる。家僕煙草盆を持って来る。

玉川 か前さんのか名前は、勝海競藏さんといひましたと覺えましたが。

勝海 左様で……

玉川 手短かに御相談があるが、か前さんの業跡で私に頼まれては呉せんか。

勝海 ヤッレは辱あいことでございます、私もこちらへ歸りましてまだあにもやりませんから、是非願います。

玉川 「私」は彼土で經濟學をして居ましたが日本へ歸つて見ると、工業がさつぱり進で居あいから一ツ造鉄と器械を兼た工業を始めやうと思ひます、實に工業は國の花ですから、此頃或人輩と

も話して見たが皆よからうといふ事故考へ最中の處、幸いか前さんに邂逅しました、か前さんは實地に苦みあさつた事あるし、殊に彼土で腕前も聞たこと故、御相談によりては……

勝海 ッレハ私も好都合で、

といふ内に、家僕は茶も菓子(櫻餅)も主客の前に出す。玉川は一間に入て洋服を和服に替へる中、家僕に何にか申付たるものを見え、暫時のうちに酒肴が整ひ。

玉川 「何もありませんが有合の漬物で一ツ」といひ乍ら「ラッシュを左の手に」「コレハ櫻田でか口には合いますまいが」「とコーンシュルウを右の手にキユ〜ボン「サー」ッ」。

勝海

コレハ圖らず頂戴致しませう。

玉川

れ前さん從覽じた通り、今日の花見をぞで日本人の氣質は大體お分りだらうが、日本人は一寸とした事にわい／＼と熱に浮かされるが、西洋人のやうに絶切った事が出来ません子！。

勝海

西洋にも一寸とした事に随分浮かされるものがありませう、熱に……。

玉川

ワヤといふて總体の上から見て、萬事あちらには叶ひませんよ。

勝海

華美のことを好む氣象と遊びを慕ふ心は、西洋も日本も違ひませんが、辛苦に堪へて萬事手強くやるのは、中々西洋人には叶ひません、君のか

玉川

ッしやる今日の花見のやうなもので、樂もうととしてはわい／＼ドヤ／＼出掛ますが、借苦じまうとして、花見の人の様あことはありません。彼地の人は一國の事とあるとイヨ苦まんとする。日本には其氣象はありませぬ。

ソレハ來年が明治二十三年で、國會が開きますから、サこの國會が國の華で、それが根を張て、徳川時代の卑屈了管はさつぱりあくなり、御一新にあつても人手に事を仕て貰つてゐる、依頼根性、この根性があくなつて、明治二十四年より、一國の事とあると自分の頭に響くことが速く分

るに依て、力の入れどころが違つて来ませう、
と萬里の波濤を起て、久しく苦んできた兩人が、波の打つや
うに話が長くあり、一己の工業話だと思ひの外、政事話にあ
つて来たかと、玉川は話に氣を付けて、

コレハ妙な話に力が入て、肝要の事業話があく
あつた併し君も西洋で苦むただけ有て、職人で
さへ、是は失敬、政事談が出来ます、こゝが日本あ
ぢ、異ふよ、

勝海 イヤ痛み入ます、御話に乗て大層頂戴銘記いた
しました。

といふ時は、坐て居た膝かVの字になり或はNとあり、又W
とありましたは職人で股引が固いの、立ち癖椅子癖のあ

るのに麥酒の酔が未たのに、墨田堤の運動の疲れが出たの
に、そして、話が長いからです、

勝海 ヤ申々頂戴いたしました。

玉川 工業上の話は拙者が其元を相談いたしてゐる
人輩と話して、尙近日能くお話をしませう、ヲ君
のお住居は。

勝海 「コ、コ」と乳隠へ手をさしこんで、名刺を出し「こ
ゝに」。

玉川 花川戸、か近い處だ。

勝海 近日又緩りとお話を承りませう。

玉川 ビールだからまだか酔あさるまい。

といふ中勝海は膝が重くあつて、踵か軽く浮いて、暇乞をす

る跡にあり

尙近日れ目よ掛ります、これは御馳走さま。

玉川 左様ナレハ。

にて勝海はビールのおくびにフタクと歸り乍らア、食事をしたくあつた、八百松と氣張ふか、イヤイヤ御膳上等の場所は僕輩如きはノウウく真平だらう、ユムレッツで後がヒフテキ位の牛屋としやう、と春風に吹かれぶらりくと歸る。



浅草の錦がゴーンと水に響く。

花の錦のかざり夜具、コレ弾かあいか、ヲ、伊勢屋さん此頃の物は如何でありました。

どうも感心しません、どうも日本物はまだ需用者の目玉が卑いので、矢張物も。

といふのは大和錦であく、羅紗の荷を同業者三名打寄りて酒の間に話し合ふ處、春の末には夏服の仕入をする、六朱の厄介料を拂て、銀行の土藏で夏越をするもあれは、寒い時分よ土藏に入て、暑さを待て大道にガナく出る是は氷、

姉さんおひやを。

是から木母寺。

そんなら船を申付ませう。

旦那嬉しいこと。

三絃の天神はギীগタク、薬罐が轉ふ、西瓜も轉ふ、栗の毛球もゴロくする、皆様およんあさるの、ドレ枕を「蛇」にあり

大の字にある、春の日は長けれども馬鹿をいひあがら遊へば短いもの、屋根船には印絆切の威勢のいひ船頭がやってくる、こゝは柳光亭の樓上で、料理の拵へも船に入る、酒が入る、火か熾る、か支度が宜しうございませう、といふのでお客も藝妓ものる、左様あら御機嫌宜しうと女か船をズーッと押す、鏡に移す岸の花、川風そつと吹きくれば、白砂の波これあらで、うへより散る、櫻か雪か。

障子を少しぬいたがよからう、チト寒くあつた。
〜イお酌。

姉さんもつと詰めたがよからう、ア、熱い烟が。
これはすみません。
君一ツ。

頂戴、君一ツ姉さんか酌、姉さん一ツ「有難う、」
徳ちやん鳥渡でらんあせい、鳥が魚をではあゝ寒くあつたから水火間、旦那ごじやうだん。
福松さん一ツお弾きあさい。

ハイ只今。
春霞浮いて鳴め。
旦那ッレデハ先刻か歌いあされた所より後へ戻ります。

戻つたらあは宜からうの花衣春のかたみだ。
ロウモ感心。
安くあからう、我思ふ人はありやあしや。
かのろけですか、たよしあさいよ。

徳ちゃん一けん。
願ひます、

一イニウ三ツ、妙妙妙、シャンツンピタ、と母戦の呼吸に乗る
絃聲、櫓の音は大間だと思ひの外。

木母寺へ来ましたか。

ア、上るべし、目出度こゝに隅田川も上るべし

く。

何處へ附けませう。

植半が宜からう。

と云ふから船は植半の裏手へ。

柳光亭です。

お客様だよ、お客様ですよ。

嗜昔の長者、今の金傑家、大商人でもよし、嗜昔の大名、今の華
族、又士族でもよし、平民でもよし、イロ、お花見、否、観花宴と名
を付けて、藝妓の撰抜を東京中で五十名、是はお酌で貴夫人
貴嬢も御出席にあり、舞踏、其外に何にか大仕組、那處が都合
の宜い座敷がありさうあ、此一興を書き加へんと思ひしが
花の頃は藝妓もひくまい、藝人も世話しあからう、又花のあ
りそ、う近邊の廣い座敷は孰れも明いてぬあからう、否、否
節、儉見合せとして、こゝにて編者が櫻に梅の香を加ふ、とい
ふ演説を書きました、紳士一興の代りに、御一讀下ださ
れ。

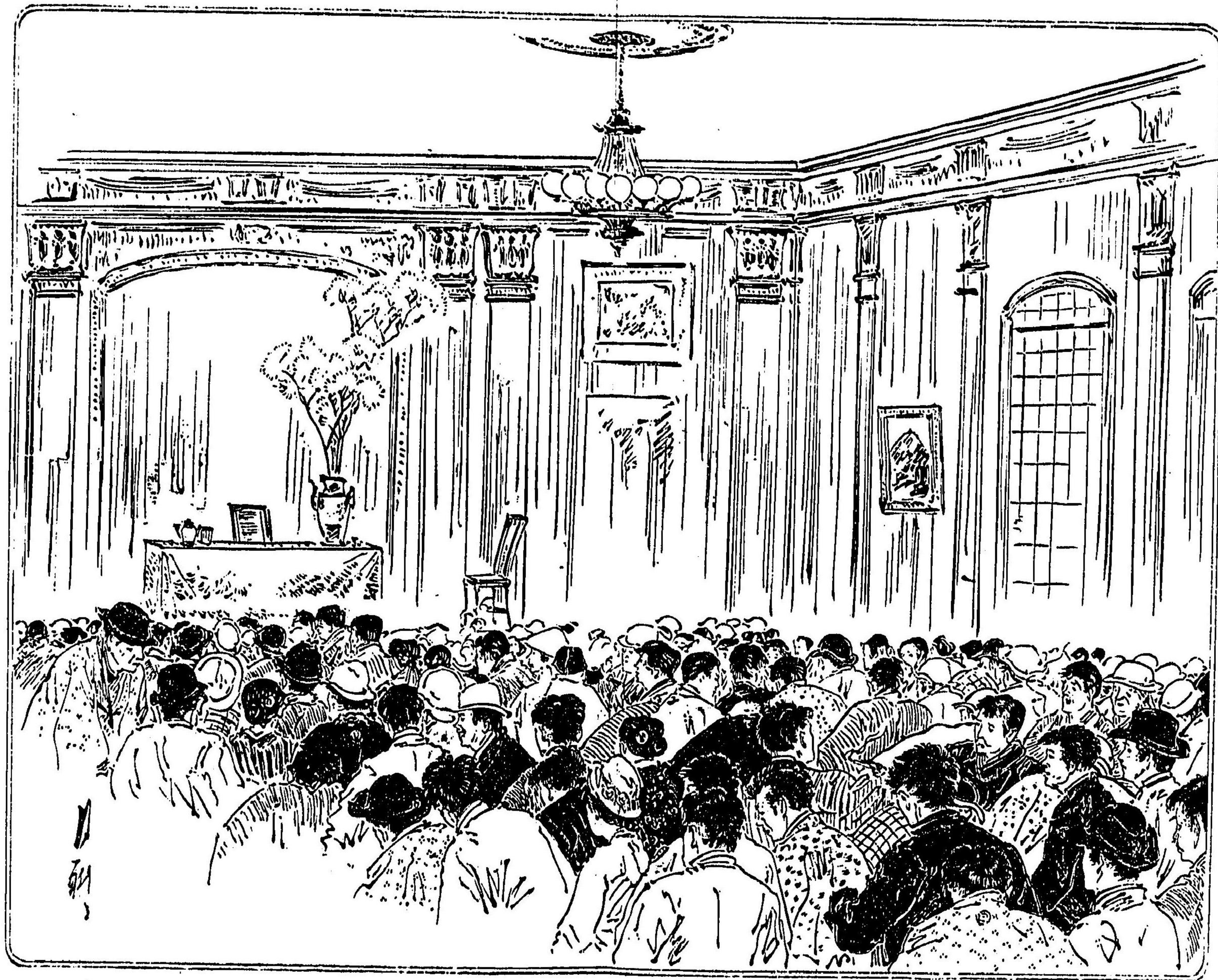


演題 櫻に梅の香を加ふ

私は東京の花の櫻を書きました、其櫻は大概飲むと喰ふ
ことを書きました、讀者諸君定めておさげすみあさるので
ありませう、が併し人間はこれで生きてゐるだけは生きて
ゐます、殊に東京の繁昌も此二ツを除いたあら、今の東京の
櫻を書く所はありますまい、私は東京の賑やかといふ所、晝
の盛り町から夜の盛り町、あんが人のわやく、噪ぎ立てる
所を行つて見ました、底で一言日本の爲めよいひたいことが
あります、日本の此東京の事は真に小さくていけませんと
いふのであります、と申すと、東京のやうな大都會の事を小
さくていけあいなを、は太いことをいふ奴だ、あを、皆さ
んが思ひあさるであります、が能くか聞きたされば成程

小さいと御承知に存ります、と考へます、其次第は私が
東京の賑やかといふ所を行つて見ませう、浅草の観音へ行つて
見れば、十歳未満の娘さんと防ちゃんのお喜ぶ店が、れ坐附で
ぐるり廻つて裏の方へ出て、何れへ出て、飲むと、喰ふ
ことばかり、上野と申すと、是も廣小路から下谷、飲み氣と喰ひ
けばかり、今度は日本橋通へ参ります、これは魚市と青物市
眞に盛ん、これも喰ひ物一方、これから銀座へかけてまいり
ます、こゝは日用の品物で、呉服店を上等として、播盆、播木も
あり、是は飲食物ではありません、けれを、銀座通にも随分飲
食屋の多いこと、でございませう、夜の盛り町の附き物、其利
益は、どうだと申せば、無論飲食屋が第一の置位を占めませ
う、神田の筋かへが賑やかだ、人形町が盛るの、新橋だ、の、兩

國だのといひ、又按摩さんの爲めに瓦斯の附てるさうな淋
 しい處にて、五色の玻璃燈三階に耀せる店先は、何かと思ふ
 と皆飲食店と申て宜しからう、ランプ數十ギラ、往來の
 人を驚かすは、飲食店であければ理髪床と西洋小間物位、斯
 うぬひますと東京中が飲食店のみの様でありませう、夜店
 の盛んも重なるものは飲むと喰ふとの二ッ晝の盛んの店
 も飲食店と五體を隠す着類に家の内に一寸入用の品位も
 ショコテ私共は是は小さいと申であります、東京は昔でさへ八
 百八町明治二十年の調で千三百六十九町と三百五十四ヶ
 村、細くいへば家が二十九万五千八百六十五軒、人が九十九
 万七千四百九十人だといふこれへ何十万の人が地方から
 入込でゐるか分らぬ、諸此千三百餘の町ある人々が大概友



喰で織に一生を過ること故、それで小さいと申す、隣の米
隣の味噌、隣の醤油、隣の薪、隣の鳥渡一山二銭三銭の肴、隣
の上酒を鳥渡あさにて織か、町の内で品の取かへことを
やッて、是で三百六十日、石の上の住居と土の上の住居は夢
の間に打過ると申たら、皆さんが御立腹あさッて、あんだべ
ラッめ生息をつけと仰らるゝ方もありませうが、サこれか
らお話申す、東京の人が残らす集ッて友喰あらは、まだよ
い、が神田は神田で、友喰の場所があり、兩國は兩國であり、芝
は芝、赤坂は赤坂、麹町は麹町、本郷は本郷、處々に友喰の小割
據と申す、小圓結と申す、かやッてめます、此友喰の種にある物
も、種から飲食にする品も、又これにかゝッてヤッキとやる
人も、其目的とする所は、眞に小さいと申す、左様申す、小

いといふけれど、其方の大きいとか、中位のはどういふもの
だと仰せらるゝでありませう、其中位のもものは面例ですか
ら大きい所をお話申さう、大きいといへば外ではあゝ日本
の産物を東京にて盛んに製造するのでございませう、其の製
造品は歐羅巴を始めとし、五大洲中何れの國へありと、ドシ
く賣り附けるので、中々買いますよ、其品は何だといふと
現今の處で陶器、漆器、銅器、此銅器に於ての色あゝいあゝ、來
ては、世界第一といふべし、續いて紙織物、煙草、蠟燭、茶、海産品
である、總て現今き、物、將來とも益すき、ものてある、此外
にも、イヤ生糸、其外皆さんお考の品がありませう、金作りの
ものはお好みとあつても、生地作りては是は成可くやらん
がよろしい、着せか減金、そんなものはイヤだといつたら、手

際をお買いと抜けてゐるのだ、又酒類、葡萄酒、教師を入れて
製しても、賣る教師は御免とやつて、此方から修業に向ふへ
行くのだ、総て彼様の製造場、職工場、賣捌所、取次屋、運漕問屋
等が何百何千町ても、ゴチャ／＼續いてあるといふ、東京であ
ければ大きい事の出来る東京とはいへぬ、今陳へたる品々
の中にて田舎で出来る品も多し、是を東京へ持ち出させ
るには、取引を極く宜くしてやるが肝腎、彼方でも口錢、此方
でも一割と、割合を取ては、カラ行かぬ、割合をとることが多
くあると直段の頭に大概きまりがある、故品が落るから行
かぬ品は益ます、良くし品を益ます多くして、歐羅巴を的に
掛けて賣り附けるのであります、然るに今日歐羅巴から
賣り附けられて此日本が困るといふものがある、何てある

といふと、綿、砂糖、石油でありませう、是を地方から出させる工風もあるが、是も地方から出るのを取次をする割合の頭のはり機が、東京で多い時は行かぬ、今此方から出さる品は高く附くので西洋に押されて、賣附けらるゝ、是をサ防がすとも、前に陳へた製造品の目的を附けるが第一であります、今の東京では大店向といふた處か田舎の店へ卸をする店のみ、其品はといへば外國からの取次が多い、あと、きては困り入たる卸店の大店、東京といへば日本の花の都であるから、田舎より大きい考を起して、外國人に負けず劣らず、品物と金銭の取引をするといふやうにあつて、一、舎へも外國向を注文して、外國から金を取て、田舎の者にも金を取らせる工風を考へねば、大きい考とは申さん、今の處はこ

れに反對で、外國人の品を以て田舎の金銭を掻き集めやうとするは、つまるところ極小さい極天、自分の何かを自分の何かで堀る様のものだ、田舎のものに金銭があれば遣ひもするが無いときは遣ふ錢も無い、東京の人が喰物にする元の種を失ふ、あんとさうではありませんか、東京の智慧のある兄さん方、花見の時分の威勢を出して、一と奮發やっつけろのか考へがほしい、東京の花が此日本の田舎の東京の花では面白く無い、今は五大洲かけ持の世の中だから、少し大きく花を咲かしたい、彼土のミルといふ人がいふのに、人自己の幸福を棄て最も能く他人の幸福を資くるは、唯世態の未だ定まらざる形状の時にあるのみと又、ベイコンといふ人が黄金世界は既往に在らずして、將來にあり、といはれました

寝て足も伸せば白根八ヶ嶽に支へ、頭を動かせば富士へホ
 ツキリといふ極極小さい播盆位の山國にゐる我輩が深川
 から月の出るを見て、又麻布の町に月の入るを見るときいふ
 都會の兄さん方にこんなことをいふのは失敬だが、兄さん
 方宜しく頼みます、と陳るが此一小冊子の終で、即ち櫻に梅
 の香を加ふといふ題の演説です。

版權登錄

日本の花櫻終

明治二十二年四月三十日印刷
 明治二十二年五月七日出版

定價二拾五錢

著者 山梨縣平民 依田 孝

發行人 山梨縣平民 天野 高之助

版權
 所有



印刷人 群馬縣平民 高橋 德壽

東京々橋區尾張町新地
 十八番地尾張町活版所

發

日本橋區通四丁目

春陽堂

同本石町二丁目

上田屋榮三郎

賣

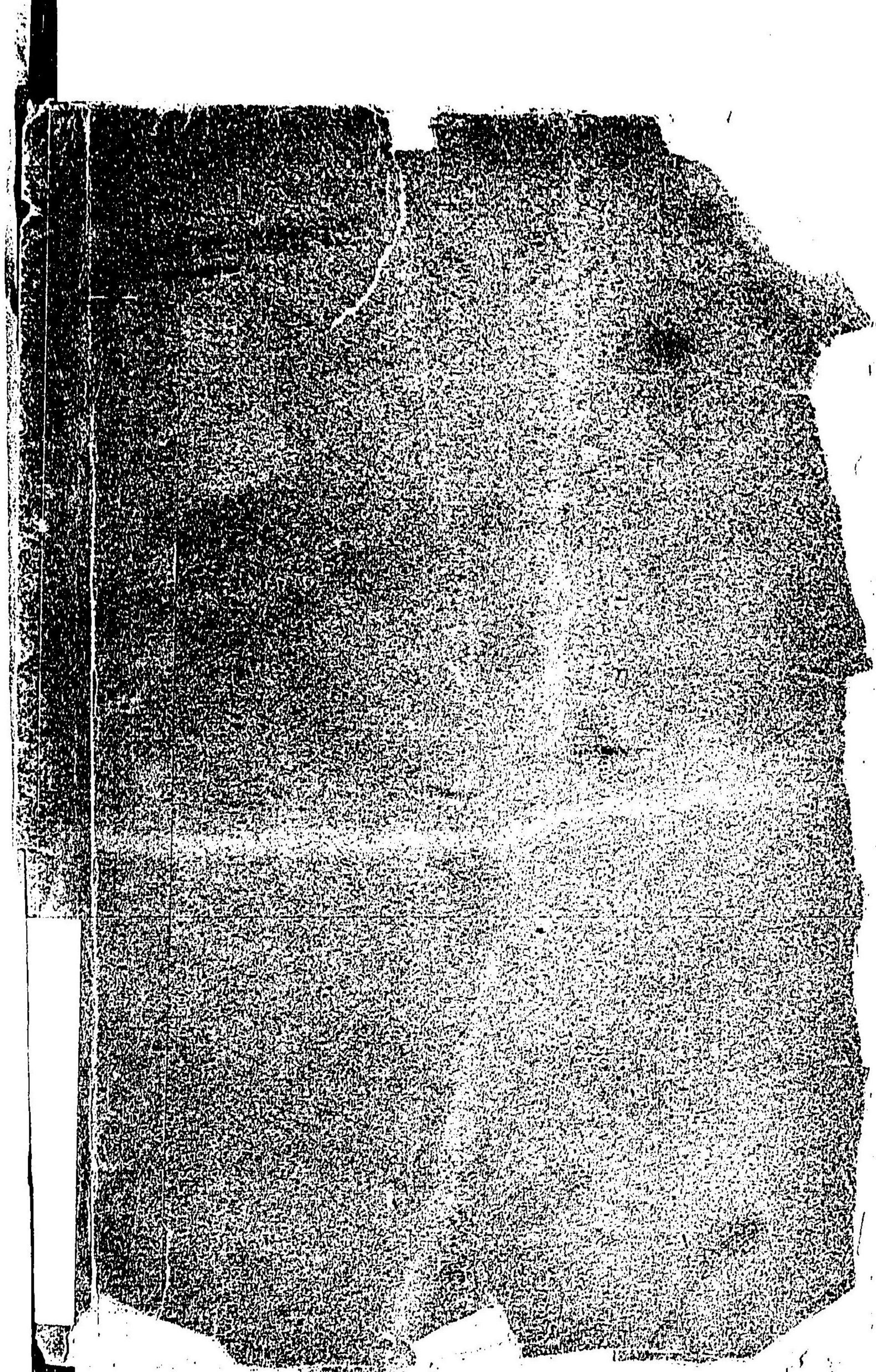
神田雉子町

團々社書店

所

淺草區三好町七番地

大川錠吉



特28

169

057195-000-5

特28-169

桜(日本の桜 東京の花)

依田 孝/著

M22

CAQ-0039

